

幼児造形表現の見方、育て方

— 大人のかかわり方の観点から —

中野友三*

はじめに

幼児は満1歳前後になると、手にものが持てるようになり絵をかくことを楽しむ。2歳頃までは、なぐりがき(スクリブル)程度で、何かを表現するというより、手を動かした跡や、しるしがつくことに興味をもっている段階である。個人差はあるが、3~5歳頃になると大部絵らしくなり、だいたい何を表現しているのか分かるようになってくる。しかし、絵としては全くまとまりがなく、もの的大小や上下、遠近などには全くこだわらずに表現する。このことは、幼児の発達段階からすれば、ごく当然なことである。

だが、大人は幼児の絵ぐらいは教えられると、大人の絵に近づけようとするなどの、間違っただ対応をしている実態がある。

このような、大人のかかわり方については、サン・テグジュペリの「星の王子さま」の巻頭にある、「ウワバミがゾウをこなしている絵」をめぐっても、如実に語られている。「大人は子どもの絵に全く理解を示そうとはせずに、いつも自分本位の勝手な見方で見てしまう。そうして、子どもが喜んでかいていることを邪魔するか、『変な絵をかかずに、ちゃんとかきなさい』などといって、小さな心を傷つけている」そして、「それでボクは絵をかかなくなったんだ」と、その子(作者)にいわせている。これは、多くの子どもたちの気持を代弁しているともいえる。

平成12年度から実施されている幼稚園教育要領では、領域「表現」の「ねらい及び内容」について、「……自分なりに表現する……」「幼児自身の表現しようとする意欲を受けとめて、幼児が生活の中で、幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにする」が、新しく加えられた。このことから、大人のかかわり方の問題点に立った改訂になっている

ことが伺える。

ところで、本学幼児教育科の「造形表現」に関する授業で、当初、コンプレックスが、前面に出た言動の目立つ学生がいた。その原因は後日、幼稚園時の、大人(先生)のかかわり方にあることがわかった。それからは、毎年「造形表現」の最初の授業で、幼児期の造形的表現活動について調査をしている。そこには、造形表現に対して、大人のかかわり方が要因と思われるいろいろなコンプレックスをもっている学生の姿が見えてくる。ちなみに、「造形表現」の授業では、造形表現が好きになることを最大の目標としているが、それは、ほとんど達成できていることを付け加えておきたい。

造形表現に対して、なぜ苦手意識をもつようになったのか分析してみると、その原因は、幼児期の造形表現に対して、大人のかかわり方が大きく影響していると考えられる。その第1の問題点は、幼児の造形表現の発達段階を無視して、大人の絵に近づけようとするにある。第2は、幼児の絵と大人の絵は全く違うことに気付かず、幼児のかく絵を、大人の視点で、「上手」「下手」のみで判断したり、評価したりする偏狭な見方をしている大人(教師)が多いということである。

本稿では、これらの仮説を検証するとともに、幼児にとって、造形表現は人格形成上、人間としての能力を一つ一つ獲得し拡大しながら発達していくうえで、特別に重要な意味をもっていることなどを考察する。

そして、「造形表現に対する大人のかかわり方が変われば、幼児が変わり絵も変わる」の観点に立って、造形表現のうち、絵をかくことに焦点を当てて述べていく。

1 幼児はなぜ絵をかくのか

表現とは、内部にあるものを外部に表すことで、こ

*幼児教育科

れは人間の本能的行為である。その一つである絵をかく能力は、生まれつき具わっているといわれている。そのため、絵をかく行為に対しては、何んの疑問ももっていないのが普通である。そこで、造形表現の根源に立ち帰る意味からも、ここで改めて、幼児はなぜ絵をかくのかについて、3つの面から考えてみたい。

(1) 絵は幼児の世界からのメッセージ¹⁾

幼児の絵は、大人から見ると稚拙であるが、何か大人の心を引きつける魅力をもっている。幼児は、その小さな世界の窓からじっと見つめ、想像したり、考えたりしながらいろいろな体験をする中で、驚いたり発見したりなどの生活をしている。幼児はこのように、体感したことを、絵や言葉にして表現している。

幼児の絵は、幼児からのメッセージであり、大人が、幼児の世界を知る手がかりとなる。幼児はこのメッセージを、一番親しい大人（先生）や友だちに贈るために、時にはダイナミックに、ある時は内緒話をするように絵をかく。幼児にとって、親しい大人に絵をみせることは、自分の世界や気持ちを知ってもらうコミュニケーションなのである。

幼児が絵をかくことは、かくという活動自体が、心の解放や発散になるだけでなく、自分の思いを大人に伝えることで、生きる活力や信頼感を生むことにもなる。

(2) 絵をかきながらイメージを広げ、認識を深める

幼児が絵に夢中になっている時は、擬音をあげながら独り言をいって、かいているものになりきっている。時には、自分でその格好をしたり吠えてみたりして、自分なりに工夫しながら感情を移入する。その中で、自分の思いや願い心の中にあるものを、絵の中に閉じ込めていく。また、同じ絵をあきることなく、繰り返しかいている。大人から見れば、毎日同じものをかいているように見えるが、繰り返しの中にも、ある時期がくると少しずつ変化や広がりが見られるようになる。

幼児は絵をかきながら自分の世界をつくり、そこからイメージを広げ、それを土台にして、さらに想像の世界を広げている。そして、自分の思いや願いを託すとともに、優しさや可愛さ、細やかさ、力強さなどの様々な感情や感性を構築していくのである。

(3) かくことで豊かな自我や叡智を育む

幼児が絵をかくことは、内発的なものであり、人間として生きていく様々な概念形成や知的形成を、体験的に構築していく自発的な行為である。これは、幼児

が自発的に学習し、人間として成長する切実な営みである。絵をかくことは、幼児が生きていくための、様々な能力を育む自発的な活動となるだけでなく、幼児が瞳を輝かせて生きている、「生きる証」のようなものである。

自分が感じたことや体験したことを絵に表現することは、言葉に表すことと同じように、自分の思いや願いを伝える大事な表現手段である。言語活動が未発達な幼児にとっては、特に大切である。自分の内にあるものを絵を通して表現し、外からのものを内に受け入れ心で確かめるといふ相互の表現活動は、自分の考えをまとめたり自我を育てたりして、心の中に叡智を育てる重要な働きをしている。

2 幼児造形表現の発達段階

幼児がかいた絵は年齢によって異なり、それぞれ独特の表現が見られる。この表現の中に、発達の段階や道筋を読みとることができる。幼児によって多少の違いはあるが、どの幼児も基本的には同じ発達の道筋をたどる。これは、幼児自らが、生まれながらに内在しているプログラムにそって、生得的・普遍的な発達をしていることにある。この発達の道筋をたどって考察

年齢	学年	絵の発達段階
— 1	年少 年中 年長 小1 小2 小3 小4 小5 小6	① いじくり期(0~1.2)
— 2		② なぐりがき期(1.2~2.5) (掻画期・錯画期・乱画期) スクリブル
— 3		③ 象徴期(2~3)(命名期)
— 4		④ 前図式期(3~6) (カタログ期)
— 5		
— 6		
— 7		⑤ 図式期(5~9) (知的リアリズム)
— 8		
— 9		
— 10		
— 11	⑥ 写実前期(9~13) (視覚的リアリズム)	
— 12		
— 13		
— 14	⑦ 写実期(14~) (リアリズム)	
— 15	高1	

熊本高工編「表現の指導 造形」同文書院 P19

図1 造形表現の発達段階

していくと、成長の過程で、いくつかの段階や特徴がみられる。この発達の道筋を知ることは、幼児の造形表現に対する正しい見方の第一歩となる。

幼児の絵や造形能力の発達段階は、多くの説が発表されているが、それぞれ少しずつ違っている。諸説の中でも、アメリカの美術教育の研究者である、ローウェン・フェルドの分類が最も分かり易く多く使われている。図1は、それを参考にして、作成した造形表現の発達段階である。

造形表現の発達段階は、地域や環境によって異なるだけではなく、個人差が極めて大きい。したがって、この段階表は決定的なものではなく、相当の幅をもって考える必要がある。

幼児の成長にしたがって、絵の表現がどのように変わっていくか、その発達の原則や基本となる事項について、次の5つにまとめて考察する。

(1) 一般の心身の発達と深い関係がある²⁾

認知機能や運動機能、感性や感情等の諸能力の発達が、絵の表現の発達を促し、反対に絵の表現が豊かに発達することが刺激となって、諸能力の発達に結びついていく。また、生活体験の充実や世界の拡大が、絵の発達や内容を深めるうえで大きく影響する。経験や体験したこと、想像したことなどを絵にすることは、幼児の認識を定着させるとともに想像の世界を豊かにし、生活の中身をふくらませていくことになる。図2は、これらの関係を示したものである。

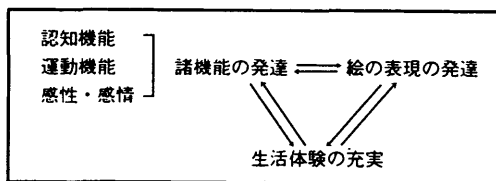


図2

(2) 基本的には原則的で、同じ発達の道筋をたどる

幼児の絵の発達は、基本的には同じ発達の道筋をたどる。生活様式の違いで多少の変化はあるが、幼児の段階では、世界中のどの幼児も共通の発達過程をたどる。

(3) 指導のあり方や幼児に個人差があるので、年齢とは一致しない面がある

幼児の絵を年齢順に見ると、基本的には、どの幼

児も同じ発達の道筋をたどる。しかし、指導のあり方や個々の幼児によって個人差があるので、何歳はこういう絵をかくと固定的に考えないで流動的に考える必要がある。

(4) 世界中のどの幼児も幼児の段階では、同じ道筋をたどる

世界のどんな国の幼児も、絵の発達の道筋は、幼児の段階では万国共通である。しかし、世界各国の教育や文化の違いによって、絵の発達は異なってくる。

(5) 環境や指導のあり方、興味関心によっても表現の発達が異なる

絵の表現の発達や遅滞については、心身の発達によるだけではなく、幼児をとりまく生活環境や文化的環境にも影響される。幼児の絵は、大人が関心を示したりほめたりすると、生き生きと絵をかき表現も高まる。また、指導のあり方によっても、大きく異なってくる。ここに、大人のかかわり方が重要になってくる理由がある。

3 幼児造形表現の特質

幼児は大人の小型ではなく、3歳なら3歳の独自の人格、人生があり、大人とは違った存在である。絵も同じで、幼児は、大人とは全く違った絵をかく。

幼児は、極めて感性の豊かな時代である。この感性の豊かさは好奇心となり、言葉では、「あのね！」が盛んに出てくる。幼児は、環境の中で受けた刺激や自分の思いから、何かを想像して喜怒哀楽の情が高まってくると、それを人に伝えたくてくる。

伝えたい相手は、必ず、「好きな人」である。幼児にとって、それを伝える一番容易な方法は、絵にかくことである。「こういうのよ」と、かいて見せるのが幼児の絵である。

幼児の絵とは思いの表れであり、伝えたい内容をもった表現である。幼児の絵は、大人へのメッセージであり、好きな人への「伝心」なのである。受け手である大人は、それを素直に喜んで受けとめ、何をメッセージしてくれているのかを、「汲心」してやるのが大切である。このことによって、送り手の心(感性)や絵の表現力を伸長させ、造形表現することに自信をもたせることができるのである。

幼児が、自分の感動や思いを伝えようとしてかいた絵は、技術的には未熟でも見る人の心に訴えるものがある。かいた本人も、心から表現した満足を味

わうことができる。幼児が造形表現に夢中になるのは、自分の思いが、自分の手によって、達成される喜びが実感できるからである。この喜びは、生きる喜びにもつながるのである。

幼児の絵は、心の窓ともいわれている。それは、絵の中に、身体上の強弱やその日の生理条件などが反映され、心のありかが正直に出ているからである。

これまで、幼児の絵の特質について、るる述べてきたが、次に幼児の絵と大人の絵の違いについて、5つの観点から考えてみたい。

(1) 幼児の絵は「聞いてやる絵」である³⁾

絵は、見る人がいて始めて絵(表現)になる。絵は見る人がいなければ、加工された単なる一つのものに過ぎない。大人はこの原理を知っていて、大人が絵を制作する場合は、自分の表現意欲にまかせてかくというよりは、自分の絵を見る人の立場に立って、客観的に見直しながら制作する。

幼児は自分の絵を他人の目で見直すことは到底できない。ピアジェ(心理学者)は、幼児の特徴を「自己中心性」だといっているが、幼児の絵は、見る人のことなどは何も考えることなく、自分がかきたいように、欲求にまかせて自己中心的にどんどんかいていく。

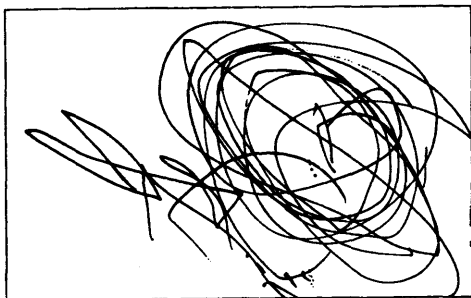


図3 スクリブル(なぐりがき) 2歳前後



図4 レントゲン画法(透視画法)

1歳から3歳くらいまでは、手や目の動きを先立たせてかく。これは「なぐりがき(スクリブル)」で、見ただけでは何をかいたのかさっぱりわからない。(図3)

3歳後半ないし4歳頃からは、言葉の意味が多面的に使えるようになり、ものごとを、形で表現することができるようになる。しかし、大人のように見たとおりではなく、極めて象徴的に、自らが知ったとおりにしかかけない。この特徴を、「知的リアリズム」といい、見えたとおりにかくことを「視的リアリズム」といっている。幼児がバスの中を、外から見えるように人物をかくのは「見たとおり」ではなく、「知っているとおりに」にかくからである。(図4)

このように、幼児と大人とでは、ものの見方に大きな違いがある。ものの見方が異なれば、絵の表現も異なってくるのが当然である。幼児の人格を尊重し、幼児の絵を大切にするということは、幼児と大人の絵の質的な違いを尊重するということである。そのためには、絵の見方も変わらなくてはならない。

大人の絵は、静かに黙って見る絵であるが、幼児の絵は見るというより聞く絵である。それは、黙って見ただけでは、幼児の意図は理解し難い絵だからである。幼児にとっても、聞いてもらうことによって、その表現の意図や内容が理解されることになる。幼児にとっては、絵の内容を聞いてもらい理解してくれる人がいて、はじめて絵をかいたことが完結するのである。

(2) 幼児の絵は趣味ではない

一般的に言って、大人にとって絵は趣味であることが多く、絵をかく趣味があることにこしたことはないが、なくてもすまされるといえる。ところが、幼児にとって、絵をかくことは人間になる(人格形成)のためには、なくてはならない必要不可欠な学習内容である。それは、生活そのものでもある。

(3) 幼児にとって、絵は発達に必要不可欠な労働の一形態である

幼児の発達にとって、絵(造形遊び)は、まさに労働の役割を果たしている。人類の発展史で、猿が人間になる際に果たした労働の役割を、幼児の場合は、絵をかくことが大きな部分を分担している。幼児が、日々の生活の中で遊び楽しむ絵や、その他の造形遊びなどは、幼児が人間に成っていくうえで、必要不可欠な労働の一形態としての意味をもっている。

(4) 幼児は文字ではなく絵で表現する

絵は、自分の考えや感情を表現する手段の一種であ

るが、幼児にとっては、文字に変わりうる唯一の表現手段とっていいほどの、重い意味を担わされている。大人は、書き言葉という表現手段を使い、文字を読み文字を綴ることによって、その事に感じ、表現したい欲求を満たすことができる。

しかし、書き言葉を、自由に駆使する生活ができない幼児にとって、絵は内面の真実を記録する手段としては、唯一とっていいほどの重い意味をもっている。

(5) 絵に反映される幼児の人格

幼児はまるで、芸術家のごとく毎日絵をかいて遊ぶ。その生活の様子は、まさに芸術家といえる。しかし、大人の場合は、社会的要求に応える責任を担っている絵である。それに対して幼児の絵は、大人の芸術家が担わされている、社会的責任や社会的制約、社会的利害・打算の全てから解放されて自由である。楽しいからかくという、「美と遊ぶ芸術」の純粹さを保持し続けている。幼児が、このように純粹であるが故に、幼児の絵には、幼児の全人格が素直に反映されるのである。

ところで、4歳前後になると絵の中に、この時期によく見られる独特なスタイルが現れる。その特質は、次の通りである。

- ① バック（背景）をかかない
- ② 帯状の空と太陽をかく
- ③ 地平線（基底線）に並べてかく
- ④ レントゲン描法（透視画法）
- ⑤ 誇張的表現
- ⑥ アニミズム（擬人化）
- ⑦ 自己投影がある
- ⑧ 展開図的表現
- ⑨ 同時空間表現⁴⁾

このような特徴が見られるのは、すでに述べたが、幼児は見ているものをかくのではなく、知っているものをかくという前提からきている。また、幼児の表現が、空間の事物への関心や認識の発達につれて、変わってくるからだともいわれている。これは、幼児が成長するうえで、自然発生的な様式として受けとめ、幼児の心を理解するために、十分認知しておく必要がある。

4 幼児造形表現の見方、育て方

幼児造形表現の見方、育て方については、(1)造形表現過程の3つの要点（三系論）(2)アドバイス、援助の方法、(3)よい絵の条件の3項目を設定して考察する。

(1) 造形表現過程の3つの要点（三系論）⁵⁾

幼児の造形表現や大人の造形表現においても、そのプロセスには、いずれも3つの大事な要点がある。

その第1は、頭の働きを中心にした、「想像の系」である。これは、「イメージの系」「おもいの系」といってもよい。

第2は、頭の中に浮かんだイメージを、具体化し見えるように色や形で外に表す、「技術の系」である。

第3は、後で関連して述べる、「伝達の系」である。

「想像の系」と「技術の系」の関係は、頭に描いたイメージを、手で表現するものとの間に、絶えずフィードバックを繰り返しながら修正を加えることができる。その際、大人の場合は、長時間放っておいても再び表現を追求することが可能である。ところが、幼児の場合は、表現の喜びはすぐに身近で好きな人に伝え、共感を得たいという伝達性の欲求をもっている。伝達の受け手である大人の受けとめ方や読みとり方、賞讃の仕方などをも含めたものを、第3の「伝達の系」といつている。

この「想像の系」「技術の系」「伝達の系」を通して、自己表現は完結する。そこで、この3つを造形表現過程の3つの要点であることから、林健造は、造形表現の三系論といつている。

幼児が絵をかく造形表現は、教えるものではなく育てるものである。しかし、絵をかくことは教えることができるのか、教えられないのかといった論争や疑問は、現在でもあり古くて新しい問題といえる。この問題は、造形表現のプロセスである三系論からみていくと分かり易い。

それによると、「想像の系」は教えることはできない。それは、幼児が何をかこうとしているのか、何を感じどんな形や色をとらえているのか、といった感性やイメージの世界は、第三者の大人が教えることはできないからである。しかし、大人は「空は青でしょ！」というように教えてしまう傾向がある。このようなかかわり方をしていると、自分の印象や感性を訴えてくる幼児は育たなくなってしまう。

「想像の系」は教えられないのに対して、「技術の系」は教えることが可能である。とはいっても、できるだけ幼児の表現方法を、尊重することが大切である。たとえ、教えられるところであっても、幼児自身に気付かせ発見できるように援助することが大切である。このようなかかわり方をすりかえの指導と呼んでいるが、是非心得ておきたいものである。

次に、幼児の造形表現では、どの系が特に大事であるについて考えてみたい。造形表現は、内にある

ものを色や形で外に表すことから、表現の本命は「技術の系」にあると、とかく技術を重視する傾向が強い。

このことは、以前から今日まで続いている状況であるが、その原因は、明治以来のわが国の美術教育が、この「如何に」に主力をおいたことにある。明治24年(1891)の頃の図画工作の目的には、「図画ハ眼及手ヲ練習シテ通常ノ形態ヲ看取シ正シク之ヲ画クノ能ヲ養イ…」とある。この影響は今日でも、大人(先生)が日常使っている言葉の「上手」「下手」の見方になって表れている。これは、作品のできばえだけを重視する、最も避けなければならない見方である。ましてや、幼児の絵を「上手」「下手」といった実物に似ているかどうかだけで見ることは、全く間違った見方という他はない。

幼児の造形表現では、「技術の系」よりも「何を」という思いや感性・感動、何を言いたかったのか、好きな人に「あのね!」と伝えたいメッセージは何なのか、といったことを読みとることが大事なポイントである。つまり、「想像の系」を重視することが最も望ましい方向なのである。

(2) アドバイス、援助の方法

幼児が、何かかいている姿を見て、なんの声もかけないで見過すのと、「何をかいたの」と好奇心をもって、話しかけるのとでは大きな差がある。そのため、大人は、幼児が絵をかいている姿を温い目で受けとめ、何をかこうとしているのか、話を聞いてやる必要がある。次に、絵をかいて持ってきた時には、「おもしろい絵をかいたね」と、目を輝かせて話しかけてやりたい。内容がわからない場合は、「何をかいたのか教えて」と聞いてみるとよい。

幼児が絵について話す時は、ゆっくりと聞き、幼児が「〇〇が走っているところ」といったら、「〇〇が走っているところなの!」と、オウム返しに同じ言葉で相づちを打つことが大切である。そして、どんな小さなことでも、「この花の色がきれいだね」と、具体的に挙げてほめる必要がある。また、もう少し工夫したらよい点などは、まず良い点をほめた後で「このところはもう少し色をぬってみたら」と、いったヒントになることを付け加えると、新しい方向づけや意欲を促すことになる。

「だめだ」とか、「きたない」「…しなさい」といった否定語や命令語などは決して口にすべきではない。「こうしたらよくなるよ」と、肯定語や奨励語を多くすることがアドバイスの要点である。

(3) よい絵の条件

幼児の絵を正しく評価するには、大人の側に、良い絵の条件があきらかになくなってはならない。

次に、良い絵の条件をあげてみたい。

- ① 感動や驚きが絵の中にかかれていて、生き生きとして新鮮で生命感が躍動している絵
- ② イメージが豊かで、自分の考えたことや思ったことが絵の中にあり、絵の内容が豊かで高まりのある絵
- ③ 色や形、構図、絵の内容に、工夫したり格闘したり、創造したのものがある絵
- ④ 人や花、家などが概念化やパターン化していないで、人には動作や特徴があり、花や家などの形に変化がある絵
- ⑤ 絵の発想の仕方、絵の表現や中身に、その幼児なりの思いや工夫がみられる個性のある絵
- ⑥ 心をこめて集中し、全力を出したその幼児なりのこだわりのある絵
- ⑦ 絵の表現は年齢によって異なるので、その発達年齢の先をいく絵がよいのではなく、その年齢として、いかに工夫し、豊かにかいているかが大切である。⁶⁾

⑦は、他の条件に比べて少し異なっているが、評価する際の重要な要点を示唆している。良い絵とは、これらの全ての条件が具わってなくても、いくつかの条件が、絵の中に含まれていれば良い絵である。

次に、良い絵の条件とは反対の、よくない絵が生まれる原因についても考えてみたい。

- ① かこうと思う内容が無いとき
- ② かく内容に興味がないとき
- ③ かき方が分からないとき
- ④ かく気が無いのかかせられるとき
- ⑤ かき慣れていないため
- ⑥ 劣等感をもっているため
- ⑦ 初めからあきらめているため
- ⑧ 他人を気にしているため
- ⑨ 似せようとしてかくため
- ⑩ 人のためにかいてやろうとしているため
- ⑪ 絵をかくことは愚かなことと思っているため
- ⑫ 惰性でかいているため

いずれにしても、望ましい絵は、望ましい幼児像と裏表であることを認識しておく必要がある。

5 幼児の造形表現にどうかかわるか

幼児が無心にかいている絵の中には、幼児の全てが

鏡のように見えている。幼児を導き育てることが出来る大人こそ、最高の指導者であり環境なのである。このような観点に立って、大人のかかわり方について、次の項目について述べてみたい。

(1) 絵も虫歯になる

幼児が絵らしいものをかき始めると、大人は、次のような略画式のチューリップや車などをかいて教えたり、かいてとせがまれて、かいてみせたりしていることが多い。



図5 大人が教えたがる「大人の絵」

この絵は、一見幼児向けのように見えるが、幼児の絵ではなく、あくまでも大人の絵である。大人は幼児の可愛さから、何気なくやっている行為と思われるが、幼児にとっては大きなマイナスになっている。例えば、幼児が喜ぶからといって、賢い大人は、甘い菓子を無制限に与えたりはしない。虫歯になり苦しむのは幼児だからである。絵に対しても、このように厳しい愛情で接することが必要である。幼児がせがむままに形をかいていると、幼児を虫歯にしてしまうのと同じことになる。

(2) 絵は教えるものではなく育てる

絵に対して甘くなり、早くから形を教えたがる原因には、2つのことが考えられる。その第1は、幼児の絵と大人の絵は、全く違うという前提に立って、幼児の絵を見ていないからである。第2は、大人は、絵くらいなら教えられたいと思込んでいることにある。文字は教えなくては覚えられないが、絵は文字のように教えればできるというものではない。絵をかくということは、形を覚えることではなく、自分の思いを形に表現することである。したがって、表現する形は、教えられるものではなく、本人が創り出すものである。

幼児は、年齢にふさわしい力が身につけてくると、自ずと絵をかく力も表れてくる。そのため、大人はそれを見守り喜んでやって、幼児の造形活動の場をつくってやることこそが大切なのである。ちなみに、絵の技術を系統的に教えることに意味をもつのは、9歳を過ぎてからである。それまでの絵は教えようとする、かえて絵をだめにしてしまうことになる。それは、幼児の育つ力に先走って無理をさせて

しまうからである。

(3) 絵の形を教える

幼児が絵をかくには、①手の働き ②目の働き ③言葉の働き ④感情や意欲 ⑤社会性、など5つの基礎能力が必要である。これらの能力は、絵をかくことによって発達する。しかし、形を教えていると、これらの能力の発達が次第に損われていくことになる。

手の働きについて考えてみると、絵をかくことは自分の意志通りに手を自由に動かすので、造形表現する手が育ってくる。しかし、形を教えると、自分で自由に手を動かして外の世界に変化を与えること、即ち、手がどういう動きをするとどんな線になるかという発見や喜びが得られなくなってくる。

形を教えられることは、他の人の、しかも大人の感覚をそのまま押しつけられることである。そのため、自分の感覚で働きかけることができなくなり、その結果として感覚が発達しないことになる。しかも、最も深刻な打撃を受けるのは言葉である。

言葉は、具体的なものが目の前になくても言葉によって想像することができるが、形だけ教えられると言葉の機能に頼らないで、教えられた通りの形でかくことになる。すると、イメージする力を否定する絵のかかせ方になってしまう。言葉によってイメージする能力は、訓練しなければ育たない。そのため、絵の形を教えることは、早いうちから幼児に色メガネをかけさせてしまうようなものである。すると、幼児は自分の目で見て自分の言葉で話して、自分の考えをまとめることができなくなってしまふ。

自分の感動や自分が見つけた真実を、生き生きと物語る絵がかけるということは、人間らしい、真実に生きる力が身につけているということである。ところで、形を教えてしまったらどう対処するかであるが、まずは、その誤りに一刻も早く気付くことである。誤りを正すことは、年齢が小さいほど立ち直りも早い。大人のかかわり方が変われば、幼児の絵はみるみる良い方に変化することは自明の理である。

(4) 絵を育てる環境をつくる

幼児が立って歩くようになると、クレヨンなどで落がきをはじめ。そこで、落がきやぬたくりなどが、十分楽しめるコーナーをつくってやる必要がある。そして、何をしてもよいようにビニールシートを敷き、その上にはゴザなどを敷くようにする。壁には、クラフト紙のような大きな紙を貼る。

ぬたくりがいっぱいになったら取り替えるが、その絵は人生最初の痕跡であるので、記念として是非とおきたいものである。コーナーには、積木や玩具類クレヨンなどを置き、紙は画用紙の他に包装紙や新聞紙なども用意する。

3歳を過ぎたら、水彩絵の具と筆を与えてもよいが、好きにさせて放っておくのではなく、必ず、皿などに溶いて使わせるようにする。大きな紙に、15号ぐらいの太い筆で、一色でぬたくりをさせることから始める。色は2・3色くらいまで増してもよい。

4歳になったら、コーナーに机を置き小さな絵はその上で腰かけてかき、大きな絵はビニールを敷いた上でかくようにする。造形活動に必要なハサミやのり、クレヨン、パス、エンピツ、色紙などは引き出しに入れておく。丸筆や平筆は、大小4本ぐらい用意する。この他に、粘土は是非用意しておきたい素材である。

5歳を過ぎると、コーナーは不必要というより、そこをはみ出しても自分で秩序をもって部屋を使うことができるようになる。画材や道具、絵の具などは、自分で始末できるようにしつけない。

これまでは、主に物的環境について触れたが、それと同時に大切なことは、大人が生活の折り節に幼児がかきたくなるような刺激を与え、生き生きとした生活の場を提供することである。生き生きとした感動あふれる絵心のこもった絵をかかせたいと願うなら、幼児にそのような生活を保証してやる必要があるであり、それは大人の責務でもある。

(5) 壊す、汚すなどの活動を大切にす

絵をかくことは、形をつくって感情や考えを表現することであるが、形をつくることは、今までの形を壊す、汚すといった側面がある。「破壊する」「汚す」という行為は、幼児の生活の中では日常茶飯事に行われている。遊びは、それが中心になっている。その代表的なものは、砂遊びや泥んこ遊びである。絵をかくことも、ある意味では、白い紙などにクレヨンやマジックインクで汚すことである。したがって、きれいな紙を汚す、変化させるということは泥んこ遊びと同質だといえる。

幼児は、本来このようなことが大好きで喜々としてやっている。そこで、周囲にあるものは、できるだけ沢山いじらせる必要がある。とりわけ、砂遊びや泥んこ遊びは、満足するまでやらせたい。その際は、汚れてもよい服装を着用されることは勿論であるが、幼児の喜びや満足を受入れることより、洗濯や掃除のことが先に気になるようでは、幼児が人間になるために必要

な学習、つまり、人間としての深い喜びを奪うことになる。幼児が育つ間ぐらいは、多少の汚れは仕方ないと、大目に見る大人の度量の広さが求められている。

(6) かいた絵をほめる

幼児が苦心して、力いっぱい努力してかいた絵は、特に、大好きな受け手である大人の賞讃や共感の言葉によって、一層送り手の意欲をかりたてることになる。つまり、螺旋的運動のように響き合うのである。

幼児の絵をほめる時は、大人が感じたどんな小さなところでも見つける努力をし、指をさしてほめる必要がある。その際は、うわべだけの言葉ではなく、心のこもったほめ方が大切である。そして、単にうまいとか、よいだけでは、何をほめられたのかよくわからないので、例えば、「目玉が大きくて強そうだ」「長い鼻がブラブラしているようだ」というように、造形用語を用いて具体的にほめるようにする。そうすると、何がよかったのか、実感として受けとめることができる。

また、「ここがこうだから、これからこうなりそうだ」といった、将来につながるほめ方にも心がけたい。

次に、ほめることとは反対に、叱ることなどについて考えてみたい。幼児の絵を大人の視点から見て「下手だ」「何をかいているのかさっぱりわからない」などと、笑ったりすることは、最悪のかかわり方である。このようなかかわり方をしていると、造形表現を嫌いにさせる大きな原因になる。造形表現の場合に限って、叱っても得るものは何もなく、萎縮させ、殻に閉じ込めさせるだけであることを十分心得ておく必要がある。

(7) 絵がかけない、かかない幼児への対応

絵がかけない、かけなくなった幼児に対して、どのように対応したらよいかは、大人（先生）にとっては、重要な課題といえる。絵がかけなくなる原因には、次のようなことがあげられる。

- ① 絵をかくことに、自信を失ったりコンプレックスをもっている。
- ② 絵をかくことに、興味関心がなかったり気力に欠けている。
- ③ 生活体験や題材に対する知識や体験が乏しく、絵をかく内容が希薄である。
- ④ 与えられた題が、その幼児にとって感動が少なく難し過ぎる。⁷⁾

これらへの対応については、それぞれの原因によって変わってくるが、いずれにしても、最も基本的なことは、前にも述べたが生活体験を豊富にすることである。そして、体験した時に感じたことや感動したこと、

驚いたこと、発見したことなどの話をさせることが必要である。その時大人は、徹底して聞き役にまわり、相づちを打ったり質問したりして、その時の様子を思い出させるとともに深めるようなかわり方が特に求められている。

絵をかく時は、絵かき歌のような、遊びやリズムなど他の動作を取り入れたり、空に指でかいてから紙にかいたりするなど、様々な工夫が必要である。

絵がかけなくなった、幼児に対する最も有効な手だては、遊びを通して幼児期の自主性を育てることである。また幼児にとって最高の玩具である、水と砂（土）を生活の場に保障することである。古い言い伝えによると、「赤ちゃんは水と土を与えないと疳の虫が出る」といわれている。水と砂（土）は幼児の手でも、容易に形を変化させることができるまたとない自然の素材である。

水と砂（土）に出会うと、幼児の活動は、まさに泥んこ遊びに発展する。その時、変化するのは環境だけではなく幼児自身も泥んこに変身する。この遊びが終わった後、汚れた手足を水で洗った後の壮快感と満足感の体験は、幼児の自主性を急速に回復させることになる。このことは、絵をかく意欲にも必ず連動するはずである。

また、泥んこ遊びの孫だともいわれている、フィンガーペインティング（ゆび絵）で遊ぶことも、絵がかけない幼児にとっては、大変効果的な活動である。これは、ミス・ショウ（フィンガーペインティングの創始者、児童画と心理学の権威）によって、多くの実証事例が出されている。

以上のような取り組みや活動にもかかわらず、全く絵をかかない幼児の対応については、幼児の生活にとっては、絵が全てではないので余り気にし過ぎないことが肝要である。幼児によっては、それぞれ夢中になるものが違うので、興味をもっている遊びを大切にしながら、絵に表現する楽しさに結びつける工夫が必要になってくる。どんなことがあっても、決して無理強いすることなく遊び心で、かきやすいところから入っていくのが望ましい。

そして、少しでもかいたら、心から喜んで大いにほめ励ましていきたい。何かかいた時は、「ここが一番好きよ」と、よいところを見つけ、指導しないでほめることが何にも増して大切である。いずれにしても、絵がかけない幼児を育て直す基本は、先にも触れたが生活に自信を回復させることである。

おわりに

幼児の絵は、その年齢や発達段階によって違いがあることはこれまで述べてきた。これらの絵と、大人の絵を比較すると、現代人と数万年前の原始時代の人々の絵との違いを想定したうえでないと、比較できないほど気の遠くなるような隔りがあるといったのは、鳥居昭美である。そして、そんな大変な違いがあるというのに、今日の多くの大人たちはこの違いを少しも考えようとせず、余りにも安易に大人の絵を幼児の生活の中に持ち込んだり、教えこもうとする傾向がある、と大人のかかわり方に大きな疑問を投げかけている。

また、林健造は、国際性とは、他国の異文化への理解と享受、共感できるということであるが、他国の異文化への共感の前に、もっと身近な大人と幼児の間にある異文化について、理解を深めていくことが大事である。その中でも、幼児の絵というものが、大人の絵とは全く姿が違う異文化的表現であることを、多くの大人たちはほとんど気づかない、と述べている。さらに、すべての大人たちはどんな大人もかつて、必ずこの道を通ってきたはずなのに、全く興味を示さないか、「変な絵」（これは下手なという意味も含まれている）と試してみたり、「妙な絵みたいなのをかいている」と見逃している、とも述べている。

両者とも、幼児の絵と大人の絵の違いを的確な比喩によって強調している。また、大人の無理解からくる、かわり方の問題点を鋭く指摘している。

自由に楽しくかいていた幼児たちが、かくことを苦手だと考えるようになったり、上手にかこうとぬり絵のように形が決まったおもしろくない絵しかかかないようにしてしまうか、否かの分岐点は、大人のかかわり方一つにかかっているといっても過言ではない。

すべては縁によって起こり、縁によって変化するといわれている。幼児の絵も、大人が良い縁になることによって、良い変化が約束されるのである。最後に強調しておきたいことは、決して幼児の絵を、大人の絵を教え込まれた受難の絵にしてはならないということである。

引用文献

- 1) 東山明, 東山直美「子どもの絵は何を語るか」
p.31 NHKブックス 1997

- 2) 前掲書 p.38
 3) 鳥居昭美「子どもの絵の見方, 育て方」 p.23
 国民文庫 1985
 4) 熊本高工編「表現の指導 造形」 p.20 同文書
 院 1990
 5) 林 健造「異文化としての幼児画」 p.20 フレ
 ーベル館 1996
 6) 1) に同じ p.193
 7) 1) に同じ p.203
- 波書店
 林 健造「幼児の絵と心」 教育出版社
 鳥居昭美「子どもの絵をだめにしていませんか」 婦
 人生活社
 ローウェン・フェルド 勝見勝訳「子どもの絵—両親
 と先生への手引」 白楊社
 岡田 清「幼児の絵の見方」 創元社
 井手則雄, 久保田浩「幼児の絵」 誠文堂新光社
 花篤美・岡田愨吾・辻正宏編著「造形表現 理論・実
 践編」三晃書房
 宮武辰夫「幼児の絵は生活している」(改訂新版) 文
 化書房博文社

参考文献

サン・テグジュペリ 内藤濯訳「星の王子さま」 岩

(受理 平成13年10月30日)

Abstract

How to Evaluate Develop Preschool Children's Formative Expression

—From the Viewpoint of Adults' involvement—

Tomoso NAKANO*

Children naturally love painting. Adults, however, often miss the difference between adults' pictures and children's and evaluate only by "good" or "bad", eventually deprive them of the pleasure of painting.

In order to develop children's painting free and lively, it is important how adults are involved in it. From this standpoint, I set up five items and examined them.

(Received October 30, 2001)

*Department of Early Childhood Education